認知の柔軟性尺度（CFI）日本語版の作成と妥当性

○徳吉陽河¹・岩崎祥一¹

(¹ 東北大学大学院 情報科学研究科)

キーワード: 認知の柔軟性, 自動思考, 情動

Development and validation of the Cognitive Flexibility Inventory

Yoga TOKUYOSHI¹, Syoichi IWASAKI¹

(¹The Graduate School of Information Sciences, Tohoku Univ.)

Key words: Cognitive Flexibility, Automatic thought, Affect

目 的

Cognitive Flexibility Inventory (CFI) (Dennis & Vander Wal, 2010) は、個人の「信念」を反映した「認知の柔軟性」に関わる自己報告形式の尺度である。特に、CFI は、個人が不適応な考えを入れ替えたり、バランスのある思考や適応した思考を取り入れるなど、よりよい変化に必要な思考や態度の「柔軟性」を測定するために作成された。

CFI は、当初 3 つの視点で作成された。その 3 つの視点とは、(1) 困難な状況で、コントロールが可能であることを認知する傾向、(2) 人生の出来事や行動において、複数の代替案を認知する能力、(3) 困難な状況で、複数の解決策を生み出す能力である。

その後の調査では、CFI は、「代替 (Alternatives)」、「統制 (不能) (Control)」の 2 因子 (20 項目) が確認された。なお、内容に関して、「代替 (Alternatives)」は、「私は状況を読み取る目がある。」、「意思決定をする前に、多くの選択肢を考える。」、「しばしば、異なった視点から状況を読み取る。」など、状況を代替できる内容で構成されている。一方、「統制 (不能) (Control)」は、「困難な状況に直面したとき、私は自分を統制できないと感じる。」、「困難な状況に直面したとき、意思決定がなかなかできない。」、「困難な状況では、私には物事を変えていく力がないことに気づく。」など、統制ができない内容で構成されている。

今回は、CFI を、カウンセリングやコーチング、認知心理学による実験などで利用するために、日本で活用可能であるか検討を行う。そこで CFI の翻訳権を取得して翻訳を行った。また、CFI 日本語版の逆翻訳を行い原著者に確認してもらった。

CFI 日本語版は、認知行動に関わる「妥当性」があるか、「自動思考」、「認知の情動」、「認知行動コーピング」に関わる尺度との間で検証を行う。

方 法

調査参加者: 東北地方、関東地方の大学生 204 名 (男性 133 名、女性 71 名) で、平均年齢 19.7 ($SD=3.1$) であった。

調査時期: 2010 年 12 月～2011 年 1 月に、授業中に実施した。

質問紙の構成: (1) CFI 日本語版。(2) ATQ-R 短縮版 (坂本ら, 2004): Beck の理論に関連する尺度で、「ポジティブ (ATQ-P)」と「ネガティブ (ATQ-N)」な自動思考を把握できる。(3) PANAS (Watson, Clark & Tellegen, 1985): 「ポジティブな情動」と「ネガティブな情動」を測定でき、認知心理学などの実験でもよく利用される。(4) SCMS (自己統制と管理に関わるコーピング尺度): 認知行動アプローチによるもので、「自己評価 (ネガティブ)」、「自己客観視」、「自己強化」の 3 つを測定できる。

結 果

CFI の原著のモデルで、最小二乗法による「確認的因子分析」を行ったところ、 $GFI=.825$, $ACFI=.783$, $RMSEA=.074$, $AIC=437$ であった。次に、CFI について、最尤法による「探索的因子分析」を行なった。その結果、CFI は原著と同様に「代替 (Alternatives)」、「統制 (不能) (Control)」の 2 因子が確認された。代替因子は 10 項目で、因子負荷量が .51 以上、信頼性係数 (α 係数) は .88 であった。統制 (不能) 因子は、6 項目で、因子負荷量が .37 以上であり、信頼性係数は .77 であった。一部、CFI は、因子負荷量が少な

い項目があり、日本の習慣と一致しない項目がため、それらは除外した。最終的に 20 項目のうち 16 項目が利用可能であることが判明した。今回の信頼性の高さと因子分析の構造から、CFI は利用が可能であると判断した。

CFI の探索的因子分析によるモデルの確認的因子分析は、 $GFI=.842$, $ACFI=.799$, $RMSEA=.075$, $AIC=361$ であった。今回は、AIC を基準に、CFI が探索的因子分析によるモデルに適合していると判断した。

探索的因子分析による CFI の代替因子の平均値 4.8 ($SD=0.9$)、統制 (不能) 因子の平均値 4.2 ($SD=1.0$) であった。

次に、CFI の妥当性の検証のため、各尺度との間で相関分析を行った (Table 1)。

Table 1 認知の柔軟性 (CFI) 尺度と他の尺度との相関分析

尺度	因子の内容	代替	統制 (不能)
CFI	代替 (Alternatives)	1.0	-.05
	統制 (不能) (Control)	-.05	1.0
ATQ-R	ネガティブな自動思考	-.04	.48***
	ポジティブな自動思考	.16*	-.25***
PANAS	ネガティブな情動	.07	.40***
	ポジティブな情動	.41***	-.14*
SCMS	自己評価 (ネガティブ)	-.19*	.42***
	自己客観視	.49***	-.16*
	自己強化	.35***	-.09

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$, $r<.30$ 以上は、太文字

考 察

因子分析と信頼性分析による結果から、CFI 日本語版は、十分に利用できることが確認された。CFI の妥当性の分析で、「代替因子」は、PANAS の「ポジティブな情動」、SCMS の「自己客観視」、「自己強化」に関連しており、ポジティブな認知の側面と関連していることが確認された。一方、CFI の「統制 (不能) 因子」は、ATQ-R 短縮版の「ネガティブな自動思考」、PANAS の「ネガティブな情動」、SCMS の「自己評価 (ネガティブ)」と相関があることから、尺度の妥当性は確認されたと言える。

今後は、CFI を認知心理学の実験や認知行動療法、認知行動コーピングなどに利用して検証されることが望ましい。

引用文献

- Dennis, J.P., & Vander Wal, J.S. (2010). The Cognitive Flexibility Inventory: Instrument Development and Estimates of Reliability and Validity. *Cognitive Therapy and Research* 34, 241-253.
- Mezo, P. G., (2009). The Self-Control and Self-Management Scale (SCMS): Development of an adaptive self-regulatory coping skills instrument. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, 31, 83-93.
- 坂本真土, 他 (2004). Beck の抑うつモデルの検討-DAS と ATQ を用いて- 日本大学心理学研究
- Watson, D., Clark, L.A., & Tellegen, A., (1988). Development and validation of brief measures of positive and negative affect: the PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology* 54 (6), 1063-1070.